

## 漢字一日一字抄

— 漢字・漢語・漢文の窓〔十月・十一月の部〕 —

堀 誠

キーワード：漢字、漢語、漢文、六書、故事成語、国語教育

【要旨】早稲田大学教育総合研究所二〇〇八～九年度公募研究「漢字・漢語・漢文に関する教育方法の検討」（主任：堀 誠）の活動成果の一部として提出するものである。

研究部会活動において、ある漢字一字を四〇〇字でレポートする「漢字一字雑抄」という取り組みを行った。それは自分自身の新たな漢字・漢語・漢文に関する意識を高め、自らの葉籠を創りだす試みにほかならない。四〇〇字という字数制限のもので、自らの個性にしたがって内容を選択して構築するとの趣旨に沿って、十月・十一月の日録形式で漢字を選んで書きまとめたものである。

## 【報告】

漢字・漢語・漢文は、教育の現場でどのように工夫して教えられ、どのような成果を生み出し、かつ、その裏にはどのような失敗や困難がひそんでいるか。二〇〇八～九年度早稲田大学教育総合研究所公募研究「漢字・漢語・漢文に関する教育方法の検討」（主任：堀 誠）は、かかる教育現場の現状を校種を超えてあるがままに認識し、その教育活動の実践体験を踏まえた成果の交流を通し

て、広域的な教学の将来を展望することを企図してスタートした。小学校・中学校・高等学校・大学の教員および大学院生・学部生によって構成された部会活動は都合十五回におよび、毎次、部会主任を含む二～三名がレポートを担当した。その一つところに知恵を出しあう時間的・空間的な営みは、幸いにも「早稲田教育叢書」の『漢字・漢語・漢文の教育と指導』（二〇一一年三月、学文社刊）として、第Ⅰ部「漢字・漢語・漢文と教育を考える」、第Ⅱ部「小学校・中学校・高等学校・大学の実践指導から」、第Ⅲ部「中国・韓国・欧州からのレポート」の構成のもとにまとめることができた。

研究部会活動では、研究報告・発表のもう一方で、ある漢字一字を四〇〇字でレポートする「漢字一字雑抄」という取り組みをも推進した。それは各自が自分自身の漢字・漢語・漢文に関する意識を高め、自家葉籠を創出するための試みにほかならなかった。字数は少なくしぼるに如かず。四〇〇字という字数制約のもとで、個性にしたがってレポートを構築するところがポイントとなる。

この試みは、レポートする本人が万事に最も勉強になる。漢字・漢語・漢文をめぐる学びの庭の創生にはかならず、そこに潜在する「ことば」の源泉に遊び親しみ、「読む」「書く」「話す」「聞く」という言語行為に不可欠と思われる根源的な力を発見して、その力

を育む実践的な方法の考案、その教材と指導法の提案にも架橋し得るものである。すなわち、漢字のもつ歴史、漢語・熟語・故事成語の成り立ちとその意味世界、そして訓読による漢語・漢文の理解方法など、さまざまな視点から現実を見つめ直し、漢字・漢語・漢文の世界を多角的に掘りおこすこと、「伝統と文化」に連なり「ことばの力」の源泉を探究することも包含される。

本「漢字一日一字抄」は、時候や習俗等々に着眼して選んだ漢字にまつわる篇章を日録形式でまとめたものである。それは研究部会の精神を引きつぐものであり、このささやかな篇々が、あらためて漢字・漢語・漢文の多様な世界に接近し、それらを多視的に科学する契機となることを期待してやまない。かつ教育の現場と教員養成の場に還元し得る材料の含有されることを念願する。

○十月一日

常用漢字 旧字体 簡体字 呉音 工

## 衣

漢音 イ  
訓 ころも

「衣」は、えりもとの形を描いた象形文字。後ろのえりを立て、前のえりを合わせたさまにかたどり、ころもの意をあらわす。

「衣鉢」は、仏教で、僧の袈裟と托鉢のはち。師から伝えられるもの、奥義をもいい、「衣鉢を継ぐ(伝える)」と用いる。「衣」は広く衣服を指すが、狭義では、上衣を「衣」、下衣を「裳」と区別する。後漢の班固の『風俗通義』衣裳篇には、「衣は、陰なり。裳は、輓(ふさぐ意)なり。」とあり、衣裳ははだを隠すものとの認識がみえる。『詩経』齊風の「東方未明」にいう「衣裳を顛倒す」は、衣と裳とを取り違えることで、非常にあわてる、狼狽することにたとえる。

「衣」は、着る意ももつ。『論語』雍也篇にいう「肥馬に乗り、輕裘を衣る」は、富貴な生活をいう。「裘」は、かわころも。

故郷に錦を飾る栄誉を、「衣錦(錦を衣る)の榮」という。『史記』項羽本紀の項羽の言にみえる「繡を衣て夜行く」は、みごとな刺繡の衣服を着て夜歩く意で、誰にも知ってもらえないことにたえたもの。

○十月二日

常用漢字

## 表

呉音 ヒヨウ  
漢音 ヒヨウ  
訓 おもて・あらわす・あらわれ

「表」は「衣」と「毛」とから成り、毛皮で作った上衣、また、毛皮の上衣をおもてにして着ることをあらわし、転じて、おもて、あらわすの意に用いる。

「表裏」は、おもてとうら。外と内。前と後。晋の潘岳「夏侯常侍（夏侯湛）の誄」に見える「人は其の表を見て、其の裏を測る莫し」は、世の人が表面（めん）を見るだけで、裏面を推し量ることがないことをいう。「表裏を為す」は、表と裏の關係にあること。「表裏相応ず」「表裏相依る」は、表と裏がたがいに応じて援けあうこと。「表意文字」は、漢字のように、意味をあらわす文字。「表音文字」は、ひらがな・カタカナやローマ字のように、音声をあらわす文字。

「先帝 創業未だ半ばならずして中道に崩殂せり。今 天下三分して益州は疲弊す。此れ誠に危急存亡の秋なり」は、蜀の諸葛亮が書いた「出師の表」の冒頭の文。「表」は文体の一種で、事理を明らかにして君主に告げる文、君主に対して心意を表明するべく書いた文。

○十月三日

常用漢字

## 登

呉・漢 トウ  
慣 ト  
訓 のぼる

「登」は、上へのぼる、上にあげる意をあらわす。また、穀物が熟する、みのある意をあらわす。『孟子』滕文公上篇にいう「五穀不登」は、「五穀登らず」と読み、五穀が熟さないことをいう。明の小説『水滸伝』引首には、真宗のあとを継いだ第四代仁宗皇帝の在位四十二年間の中で、即位後の天聖元年から同九年までの九年間を一の登、明道元年から皇祐三年までの九年間を二の登、皇祐四年から嘉祐二年までの九年間を三の登、この三九二十七年は天下太平で五穀はゆたかにみのり、民草はみな業を樂しみ、三登の世と称賛されたが、はからずも嘉祐三年の春さき、天下に悪疫が流行し、かくて樂しみの果てに悲しみが生じたと、『水滸伝』のストーリーに導いていく。

いわゆる九月九日の重陽の節句には、茱萸を頭に挿して家族で小高い山にのぼり、菊酒を飲む「登高」の習俗が行われる。また正月七日あるいは十五日にも「登高」が行われた。

○十月四日

常用漢字

## 私

呉・漢 シ  
訓 わたくし・わたし

「厶」は、自分のものを取り囲んでいるさま、鼻を横から描いた

さま、曲がった枝でつくったすきのかたち、ひじを曲げたすがたをかたどったものといい、わたし、自分、すなわち第一人称の意味をあらわす。これに「禾」を加えた「私」は、収穫した穀物から自分の分をかかえこむこと、それぞれ個人が所有する意をあらわす。

「公」に対する「私」は、自分ひとりの権益などの意もいい、動詞で「私す」は、自分のものにする、自分の勝手にするの意。

「私語」は、低い声でひそかにささやくこと、ひそひそばなし。玄宗と楊貴妃のラブロマンスとして知られる唐の白居易の「長恨歌」にいう。

七月七日 長生殿

夜半 人無く私語せし時

天に在りては 願わくは比翼の鳥なと作り

地に在りては 願わくは連理の枝なと為らん

「比翼の鳥」は、雌雄二羽ながら、一方の翼が結合して一体となつてとぶ鳥。「連理の枝」は、二本の樹の枝が結合して理（木目）が連なつた枝。七夕の夜半に二人がかわした密語である。

○十月五日

常用漢字

漢音 コウ

呉音 ク

訓 おおやけ

## 公

「公」は、「八」と「厶」とから成る会意文字。「厶」は、「私」の古字で、「八」は開く、あるいは背く意。『韓非子』五蠹篇に、「私に背くを公と謂う」という。『説文解字』には、「公は、平分するなり」とあり、私にそむいて平らかに分かち意とする。また、腕

でとり囲んだものを開くこと、入り口を開いて公開することから、おおやけ、おおやけにする意をあらわすとも説かれる。

『書経』周官にいう「公を以て私を滅せば、民其れ允よに懐く」は、天下の公利のために私欲を捨てれば、民衆は真になつきしたうこと。「広を奉じて法を守る」は、公事すなわち公の仕事に力をつくし、法律を守る意。

「奉公」は、公事・国家のために力を尽くすこと。『漢書』朱博伝に、「誠を竭くして公に奉ず」といった用例がみえる。「滅私奉公」は、私心を捨てて公のために尽力する意。

「公是」は、私心がなく隠しだてのないこと。「公明正大」は、心が潔白でやましさがないこと。

○十月六日

常用漢字

漢音 チョク

呉音 ジキ

訓 ただち・なおす・なおル

## 直

「直」の原字は、「目」に「十（十はその変形）」を添えて、まっすぐに目を向ける、まっすぐに見ることを示し、引いて、まっすぐ、ただちにの意をあらわす。

『論語』季氏篇に、「直きを友とし、諒まことを友とし、多聞を友とするは、益なり」との孔子の言を伝える。正直な人、誠意のある人、見聞の多い人を友人にもつことを有益だとする「益者三友」の教えである。これに対して、「便辟べんぺきを友とし、善柔を友とし、便佞べんたいを友とするは、損なり」と、体裁ぶつた人、優柔不断な人、阿諛あゆ勉めん佞べいの人を友人とすることを損益だとする。

「直情径行」は、思ったままに感情をむき出しにして、そのまま行動すること。「径」は、まっすぐに、ただちにの意。

「単刀直入」は、ひとふりの刀を手にして敵陣にまっしぐらに切りこんでゆくこと。回りくどい言動によらず、率直明快に要点や核心にふれることをいう。

「直」は、「値」に通じて、あたいの意もあらわす。「春宵一刻直千金」の句が有名。

○十月七日

常用漢字

漢音 キョク

呉音 コク

訓 まがル・まゲル

## 曲

「曲」は象形文字で、木や竹などで作ったまげもののおさまを描いたとも、まがったものさしのさまをかたどるともいい、まがる、まげる意をあらわす。

「曲学」は、まがった学問、正道ではない学問の意。『戦国策』趙策に、「曲学 弁多し」という。「曲学阿世」の「阿世」は、世間おもねに阿りへつらう意。真理をまげた邪悪な学問によって俗世の人気をとり迎合することをいう。

「曲肱」は、ひじを曲げる意。『論語』述而篇に、「肱を曲げて之を枕とす、楽しみも亦た其の中に在り」とある。孔子の弟子、顔回は、ひじを曲げて枕にするような貧乏な生活をしながらも、道を楽しんだ。清貧に安んじて道を楽しむことを「曲肱の楽しみ」という。

「委曲」は、細かいことから。「音曲」は、音楽の節まわし。「曲水」は、昔、三月三日に流水に杯を流し、詩を賦して遊ぶために作っ

た湾曲した流れをいう。

○十月八日

常用漢字

呉音 ゼ

## 是

漢音 シ

「是」は、「匙し」の原字で、さじの意をあらわす。その音を借りて、「之」とともに近称の指示代名詞、また、正しい意に用いる。

「是非」は、正しいことと間違ったこと。正と不正。『史記』太史公自序に、「是非を明らむ」との用例がある。転じて、日本では、どうしても、必ず、きつとの意で、副詞に用いる。「是非の心」は、正しいことと間違ったことを見分ける心。『孟子』公孫丑篇に、「是非の心は、智の端なり」と説く。

「是非是非」の「是是」は、動詞+目的語の構文で、返り点を打って「是を是とす」と読み、よいことをよいとする意。『荀子』修身篇に、「是を是とし非を非とするは、之を知と謂う。是を非とし非を是とするは、之を愚と謂う」とあるのが「是非是非」の出典。

「是非曲直」は、「曲直」も曲がったことと真っ直ぐ正しいことの意味で、物事のよしあしや正邪を意味する。

「是正」は、間違いを正す意。

○十月九日

常用漢字 旧字体

慣用音 ジツ

呉音 ジチ

漢音 シツ

訓 み・みのル

## 実 實

旧字の「實」は、「ウ」と「周(圃)」と「貝」とから成り、家中に財宝が満ちることから、みちる意、転じて、みゆる、みの意をあらわす。常用漢字の「実」は、省略形。

「華(花)実」は、花と実。外形と実質、形式と内容。「華実相称う」は、その両者がともなう意。『論語』子罕篇にいう「苗にして秀でざる者有り、秀でて実らざる者有り」は、苗のまま穂を出さない人、穂をつけながら実らない人に対して、努力が肝要であることを説いている。

「充実」は、充ち実ちる意。「誠実」は、いつわりがなくまごころがあること。「有名無実」は、名ばかりで実質がないこと。「虚実」は、反意語を重ねた熟語で、うそとまこと、ないこととあること、また、事の真相をいう。明に成立する『三国志演義』の物語は、「実七虚三」(事実七割虚構三割)と評される。

清朝考証学で重んぜられた「実事求是」は、事実にもとづいて是(事実の真相や真理)を求めることを意味する。

○十月十日

常用漢字 旧字体

俗字

呉音 タイ

漢音 テイ

訓 からだ

## 体 體 躰

旧字の「體」は、「骨」と「豊」(つらなる、ならべる意)とから

成り、からだの意をあらわす。「体」は、「人」と音符「本」から成り、太い、粗末の意をあらわす。古くから「體」の俗字として用いられた。

「体を濡し足に塗る」は、からだに汗をかいて、足を泥まみれにして働くこと。農夫の耕作の労苦をいう語。『管子』小匡に、「日暮を以て田野に従事し、(略)体を沾し足に塗り、其の髪膚を暴にす」と出ている。

「体を得」は、秩序が整っていること。『礼記』仲尼燕居に、「官は其の体を得て、政事は其の施を得」とある。

「三育」の一つに数えられる「体育」は、身体の健全な成長を促し、健康な生活を営み豊かな人間性を養うことを目的とし、学校教育の教科名にもなっている。

スポーツの世界でよく使われる「心・技・体」は、嘉納治五郎序・古木源之助著『柔術独習書』(明治四十四年十二月、制剛堂)第一篇第二章「柔術ノ目的」に記す「一、身体の發育」(体)、「二、勝負術の鍛練(即ち護身の用)」(技)、「三、精神の修養」(心)の修業法に源流するともいわれる。

○十月十一日

常用漢字

呉音 シユ・ス

漢音 シユウ・シウ

訓 て・た

## 手

「手」は、腕・上肢、手の指、てのひら、手首、手立てなどを意味する。「手中」は、手の中、手の内。唐の孟郊は「遊子吟」に、

慈母 手中の線  
遊子 身上の衣ころも

と、慈しみあふれる母の手にある糸は、旅立つ子が身につける衣を縫うものであると母の慈愛を対句で詠じている。

「手 巻を積たてず」は、書巻を手から離さないことで、学問に努めて倦まないことを意味する。『三國志』魏書・文帝紀の「評」注に引く文帝（曹丕）「典論」の自叙に、「上（曹操）雅より詩書文籍を好み、軍旅に在りと雖も、手 巻を積たてず」と、曹操の好學ぶりが記される。

「手を以て額ひたいに加う」「手を挙げて額に加う」は、両手を組んで額につけることで、喜悅の心をあらわす。

○十月十二日

常用漢字

## 足

呉音 ソク

漢音 ショク

訓 あし・たりル・タル・たス

「足」は、ひざからあし先までを描いた象形文字で、あし（ひざから下）の意をあらわす。これを借りて、「たす」意に用いる。

「足下」は、足の下、足もと。『老子』第六十四章、「千里の行も足下より始まる」という。また、人に対する敬称として、あなた、きみ、貴下の意で用いられる。

「足を躡かみ耳に附く」は、相手の足をふんで合図し、耳をつけてささやくこと。他人にさとられないように話す意。『史記』淮陰侯（韓信）列伝に、斉を平定した韓信の使者が到着し、韓信が斉の仮王にしてほしいと願った書簡をみた漢王（劉邦）が怒りののしる折

から、「張良・陳平 漢王の足を躡み、因って耳に附けて語る」と記載されるのに基づく。

「知足」は、『老子』第三十三章に、「足るを知る者は富む」とある。足りることを知って、身のほどをわきまえ欲ばらないことを説いた教え。

○十月十三日

常用漢字

呉音 シユ

漢音 シユウ（シウ）

## 首

訓 くび

「首」は、髪のはえた頭部を描いた象形文字で、頸くびから上のあたまの意をあらわす。

「首尾」は、こうべと尻ぽ、はじめとおわり。律詩のはじめの二句を「首聯」、おわりの二句を「尾聯」、中間の二句ずつを「頷聯」「頸聯」とよぶ。日本語では、「首尾」を、なりゆき、顛末、結果、都合よくゆくことなどの意で用いる。

「首級」は、討ち取った敵の首くび。昔、秦の法では、敵の首を一つとれば、爵一級を進めたことに由来する。三國時代、蜀の英雄である趙雲は寝首を搔かれて生涯をとじるが、「搔首」は、手で頭をかく意。『詩経』邶風の「静女」に、

首こうべを搔かいて蜘蛛ちぢゅうす

と詠じる。「蜘蛛」は、徘徊する意。

「自首」は、自ら罪を申し出る、白状する意。「狐死して丘に首むかう」は、狐が死ぬとき、首をもと住んでいた丘の方に向ける意。もとを忘れないこと、故郷を思うことにたとえる。

○十月十四日

常用漢字

## 背

呉音 ヘ・ハイ

漢音 ハイ

訓 セ・せい・そむク・そむケル

「背」は、人が背を向けあっているさまを示す「北」と「肉」とから成り、せなか、せなかを向ける意。

「腹背」は、おなかとせなか。「背面」は、うしろ側。また、「面を背く」で、顔をそむけること。「背信」も「信に背く」で、信義にそむく、裏切る意をあらわす。

「背誦」は、本を見ないでよむ、暗唱すること。『三国志』魏書・王粲伝に、人と道端の碑を読んだ王粲が暗唱できるかと問われるや、碑に背を向けて誦じ、一字も誤らなかつたのに因む。現代中国語でも「背」はそらんじる意。

「背水の陣」は、水（川や海など）を背にしてしいた陣立て。『史記』淮陰侯（韓信）伝に、漢王の二年、趙を攻める韓信は、兵一万を先発させて背水の陣をしかせ、これを望見した趙軍はその愚を大いに笑ったと記す。しかし、これこそ烏合の衆のごとき市人を死地に身を置いて戦いに駆り立てる術策と韓信は打ち明け、みごとくに戦勝する。

○十月十五日

常用漢字

## 腹

呉音 漢音 フク

訓 はら

「復」は、おおう（覆う）意。あるいは往復の「復」の原字で、重複してふくれる意を示す。「腹」は、「肉」とこの「復」とから成り、内蔵をおおいつつむはら、腸がいくえにも重なってふくれたところの意をあらわす。

「腹中」は、はらの中、心の中。「江魚の腹中に葬らる」は、戦国時代、楚の屈原の作という「漁父の辞」にみえる語。讒言により放逐された屈原は、たとえ潔白のまま死すとも、世俗に迎合できぬことを説く。「腹中に鱗甲有り」は、腹の中にとげがある意。鱗は、うろこ。甲は、こうら。触れるとケガをすることから、人と争う性癖にたとえる。「腹中の書を囓す」は、七月七日の日中、晋の郝隆が仰臥して、腹の中に読みたたくわえた書物を虫干しした故事。『太平御覧』人事・腹に引く『世説新語』所見。ただし、『世説新語』排調篇は「我書を囓す」の語のみ。

「腹心」は、はらとむね。また、腹となり心となる頼りになる人。「抱腹絶倒」は、腹をかかえて笑いころげること。「鼓腹撃壤」は、八月八日参照。

○十月十六日

表外・人名用漢字

呉音 漢音 チン

## 砧

訓 きぬた

「きぬた」は、織りあげた布や洗った着物をやわらかくし、また、つやを出すために布地を打つための石の台。その訓は、「衣（きぬ）+板（いた）」から来ているという。「砧」の字は、「石」と「占」とから成り、きぬたの意をあらわす。

唐の白居易の「夜 砧を聞く」（砧を打つ夜なべ仕事の音を聞く）詩にいう。

誰が家の思婦ぞ秋 帛を擣つ  
月苦え風凄じく砧杵悲し

「思婦」は、不在の夫を思う妻。「帛」は、絹布。「擣」は、布や衣を擣ちたたく意。「砧杵」は、砧と杵（槌や棒）。秋の月が寒々と冴えわたる風が吹きわたる中、きぬたを打つ音が悲しげに響いているさまを詠じ、

八月 九月 正に長夜

千声 万声 了む時無し

応に天明に至りて頭尽く白かるべし

一声 添え得たり 一茎の絲

と結ぶ。一筋の白髪を増し添える砧の一声は、遠征する夫の安否を思いつつ生きる労苦を象徴する音声といえる。

○十月十七日

常用漢字 旧字体

唐音 マ

漢音 バ

呉音 メ

訓 あさ

## 麻 麻

衣料の原料となるあさの繊維は、茎を水に浸してふやかし、これをこすって繊維をはぎとり、さらにこすって繊維をやわらかにした。「朮」は、あさの茎から繊維をはぎとるさまを示し、これを二つ並べた「朮」が、あさの意をあらわした。この「朮」に「广」を増し加えたのが「麻」である。

麻はまっすくのびる草であるのに対して、蓬は曲がりがちな性質である。『荀子』勸学篇にいう「蓬 麻中に生ずれば、扶けずして自ら直し」は、蓬も麻の中に生えれば、そえ木をしなくてもまっすぐに育つ意。よい環境にあえば、曲がりがちなものも補正されて正しくなることを、「麻中の蓬」とたとえていう。

「麻姑」は、美貌で手の爪が長く、鳥に似ていたという仙女の名。後漢の蔡経が麻姑の爪をみて、もし背中が痒いとき、麻姑にかいてもらったらさぞ気持ちがいいだろうと思ったという『神仙伝』の故事から、麻姑が痒いところを搔くことを意味する「麻姑搔痒」は、物事が思うようになることのたとえとしても用いる。

○十月十八日

常用漢字

呉音 フ

漢音 ホ

訓 ぬの

## 布

「布」は、「巾」と音符「父」とから成り、平らにのぼして広げたぬの、砧で打ってやわらかくした麻ぬののことから、広く「ぬの」の意をあらわす。本来は、麻や葛で織ったものを指し、のちに綿布をも含む織物の総称。また、絹布は、「帛」とよばれる。

「布衣」は、布製の着物。古い時代には、庶人は耄老にいたらなければ帛を着られなかったもので、一般庶人の着物。転じて、官位の無い人、平民、常民、庶人をいう。

「布衣の友」「布衣の交わり」は、庶民同士・身分の低い者同士のつきあい。互いに身分や地位、欲得を離れて結ばれる交友をいう。「布衣の極」は、庶民としての最高の出世。漢の高祖に信任された

留侯張良の述懐にみえる語。

また「吾 布衣を以て三尺の劍を提げて天下を取るは、此れ天命に非ざらんや。命は乃ち天に在り、扁鵲と雖も何ぞ益せんや」は、高祖劉邦が晩年、黥布を撃つとき流れ矢に当たつて傷を病み、「病い治むべし」と答える良医を前に、慢罵していった語。

○十月十九日

常用漢字

漢音 ヒ

## 被

呉音 ビ  
訓 こうむル

「被」は、「衣」と「皮」とから成り、衣をひきよせてかぶる、あるいは、寝るときにおおう衣を意味する。名詞として、夜着、ふとん。寝衣、着物。動詞として、きる、かぶる、おおう、こうむる。また、受け身の意をあらわす助字として用いられる。「被衾」「被蓋」は、夜着やかけふとん。「被害」は、「害を被る」、すなわち害を受ける、また、受けた損害。「被酒」は、「酒を被る」、たくさんの酒を飲む、酔っ払う意。『史記』高祖本紀に、「高祖（劉邦）酒を被り、夜 沢中を徑」ったとき、前方に大蛇がいるとの報告をうけて、高祖は前行して蛇を斬つたと伝える。

「被髮文身」は、髪を毛をふりみだし、身体に入れ墨をすること。「被髮左衽」は、髪をふりみだし、着物を左前に着る。いずれも野蛮な風俗を意味する。「被髮纓冠」は、髪を毛をふりみだしたまま、冠のひもをむすぶ。非常に急ぐさまをいう。「纓」は、冠のひも。

○十月二十日

常用漢字

旧体字

## 髮 髮

漢音 ハツ  
呉音 ホチ  
訓 かみ

「髮」は、「髟」と「友」とから成り、頭上に生えでるかみの毛の意をあらわす。

「間 髪を容れず」は、一本の髪の毛を入れるすき間もないこと。事態が差ししまつていゝこと、すぐさま行うことのとえ。漢の枚乗の「書を上りて呉王を諫む」（『文選』三十六卷）に、「墜ちて深淵に入れば、以て復た出で難し。其の出づると出でざると、間髪を容れず」とある。「間髪」と読むのは、二字を連続して読むことよつて生じた訛音。

「身体髪膚は、之を父母に受く。取えて毀傷せざるは、孝の始めなり」とは、『孝経』開宗明義の所説。「髮膚」は、髪の毛とはだ。「毀傷」は、きずつける意。「孝」は、孝行、孝養をいう。

「莊子」庚桑楚にいう「髪を簡ひて櫛り、米を数えて炊く」は、髪の毛を一本ずつえらんできしげずり、米の粒を一つずつかぞえて炊いてやる意。小さなことにこだわること。「髪短く心長し」は、年をとつて髪の毛は短くなつても、知力はすぐれて深いこと。

○十月二十一日

常用漢字 旧字体

## 灯 燈

訓 ひ

〔灯〕呉 チョウ (チャウ)

漢 テイ

唐 チン

〔燈〕呉・漢 トウ

唐 トン

「燈」は、「火」と音符「登」とから成り、高くかかげるともしび、あるいはまた、油つばを用いた火ともしの意をあらわす。「灯」は、「火」と音符「丁」とから成り、燃えさかる火、あるいはまた、ある所にとめておくあかりの意で、「燈」の字に代用される。

唐の韓愈の「符（息子の名）書を城南に読む」は、「灯火親しむべし」の典故となる詩。

時秋にして積雨齊れ

新涼 郊墟に入る

灯火稍く親しむべく

簡編 巻き舒ぶるべし

長雨もやんで涼風のさわやかな秋は、夜も長くなるので、灯火に親しみ、読書するのに最適であることをうたう。

灯心の先端にできる焼えかすが花の形に固まったものを「灯花」とよぶ。また、灯火がもえはじける現象をもいう。「灯花」は、喜慶の事がおこる前兆で、『西京雜記』には、「灯火華けば錢財を得」という俗信が記される。

○十月二十二日

常用漢字

## 豆

呉音 ズ (ツ)

漢音 トウ

訓 まめ

「豆」は、ふたのついた長い足のある器を描いた象形文字で、たかつきの意をあらわす。借りて、まめの意に用いる。

たかつきは、木製や素焼きの器で、食物や供え物を盛った。ひら台を「俎」といい、「俎豆」で、祭祀に供え物を盛る器をあらわす。『論語』衛霊公篇に、衛の霊公から戦陣のことを尋ねられた孔子が、「俎豆の事は、則ち嘗て之を聞けり。軍旅の事は未だ之を学ばざるなり」と答えて、翌日には立ち去ったことを伝える。「俎豆の事」は、儀礼の意。

まめは、穀物の一種で、大豆（黄豆）・小豆（紅豆）・緑豆などがある。「豆腐」は、水に浸した大豆をひき、それを煮て製した食品として親しまれる。『世説新語』汰修篇には、乾燥した豆は至って煮えがたいのに、晋の石崇は客人に「豆粥」を咄嗟に振る舞ったことを伝えている。実は、事前に豆をよく煮て熟末にしておき、来客にあわせて白粥に混ぜて作ったとの、秘伝の即席調理法が記されている。

○十月二十三日

常用漢字 旧字体

## 道 道

呉音 ドウ (ダウ)  
漢音 トウ (タウ)  
訓 みち

「道」は、「禿」と「首」とから成り、みち、みちを行く、みちびく意をあらわす。「禿」は「𠂔」(行)の半分と「止」で、足で道を行くこと、すすむ意。

『論語』陽貨篇の「道聴塗説」の「道聴」は、道で聞きかじる、道端で聞くこと。『韓非子』外儲篇にみえる「道遺ちたるを拾わず」は、道におちているものを拾いとる人民がいけない意で、政治が行きとどいて民衆が潔白で正直であること、また、法律が厳しく、それを犯す者がないたとえに用いられる。

『論語』公冶長篇にいう「道行われず」の「道」や、『孟子』離婁上篇にみえる「道は邇きに在り、而るに諸を遠きに求む」の「道」は、人がふみ行うべきみち、真理の意。

「大道」は、大きな道。『孟子』滕文公下篇にいう「天下の大道を行う」は、人の行うべき大事な道をおこなう意。『老子』第十八章にみえる「大道廢れて仁義有り」の「大道」は、天地の真理としての道、自然の道をいう。「仁義」は、道徳的な価値判断。

○十月二十四日

常用漢字

## 塗

呉音 ブ (ツ)・ド  
漢音 ト  
訓 ぬル

「塗」は、「涂」と「土」とから成り、どろ、どろをぬる意をあらわす。転じて、みちの意に用いられる。「涂」は、どろ水、どろどろの液体を伸ばしてぬること。

『莊子』秋水篇に載る、楚の廟堂にまつられる死して三千歳の神亀をめぐる言説に、「尾を塗中に曳く」の語がみえる。「塗中」は、どろの中。「塗炭」は、どろとすすみ。『孟子』公孫丑上篇にいう「朝衣朝冠を以て塗炭に坐するが如し」は、塗炭を汚いものたたとえとする。『書経』仲虺之誥にみえる「民塗炭に墜つ」は、民衆がどろにまみれ炭火に焼かれる、いわゆる「塗炭の苦しみ」におちいる意。

「塗地」は、「地に塗る」と読んで、地にまみれよごれる意。また、「地を塗る」と読んで、地を汚す意ともいう。『史記』高祖本紀にいう「一敗地に塗る」は、ひどく敗れて地面にたたきつけられること、大敗することをいう。「道聴塗説」は、道に聴いて塗に説く意。

○十月二十五日

常用漢字

## 法 灋 灋

古字 異体字 呉音 ホウ (ホフ)  
漢音 ホウ (ハウ)  
慣用音 ハツ・ホツ

標準や手本として守るべき物事、のっとるべき事柄を、「のり」という。おきて・きまり・さだめ、法律・刑罰、決まりきったやり方・様式、模範・手本、礼儀、人のまもるべき真理をいった意味が含まれる。「法」は、生活にはめられたわく、公平な「のり」の意をあらわす。

「法家」は、春秋戦国時代におこった諸子百家の一つで、人情や道徳を排して、法律・刑罰を重んじて世の中を治めることを主張した。管子・商鞅・申不害・慎子・韓非子などの学者がいた。

『管子』法法篇にいう「法は民の父母なり」は、法律が人民を保護し生活を守る意義を父母にたとえている。「法は治の具なり」とは、『淮南子』泰族訓の言説である。法律は天下を治める用具ではあるものの、それによって必ずしも治まるものでないという。漢の高祖が秦を滅ぼしてその苛法を廃し、父老に約した「法三章」は、殺人は死罪、傷害と盗みは罪に抵るといふ明解なものであった。

○十月二十六日

常用漢字

## 理

呉音・漢音リ

「理」は、「玉」と「里」とから成る会意兼形声文字で、「里」はすじめをつけた土地の意。玉の表面にみえるすじめ、また、すじめをつけること、おさめることをいう。玉をみがく意もあらわす。

木のもく目を「木理」、皮膚のきめを「肌理」、物事のすじみちを「条理」という。「理非」は、道理にあうこととあわないこと。「理乱」は、おさまることとみだれることで、「治乱」に通じる。

「理屈」は、「理窟」の書き換え。「窟」は、いわや、ほら、あなをあらわし、道理、物事のすじみち、道理をたくさん蓄えているところ、道理をわかまえている人の意。日本語では、こじつけの理由・道理の意味でよく用い、「屁理屈」といういい方もある。

『易経』説卦にいう「理を窮めて性を尽くす」は、天地自然の理

法や人の性情を窮めつくす意。現代中国語の「豈有此理！」は、理不尽をいった語。道理に合わない、無理無体を意味する「理不尽」は、日本語である。

○十月二十七日

常用漢字

## 知

呉音・漢音チ

訓 しル

一説に「矢」と「口」とから成る会意文字で、矢のごとくに物事の本質を言いあらわすことという。

物事の本質を見通す、相手をよく知る、感じとる、治めるなどの「しる」、また「しらせる」意。また、ものしり、しりあい、しらせ、州や県の長官、ちえなどの意をあらわす。

「知者」は、物事の本質をよく見抜く人。『論語』子罕篇に、「知者は惑わず、仁者は憂えず、勇者は懼れず」という。知者は道理をわかまえるから、物事に直面しても迷わない意。

「知行」は、知識と行為。明の王陽明が説いた学説に「知行合一」がある。

「知音」は、音楽を理解する人。昔、鍾子期は伯牙が弾する琴の音を聴いて、伯牙の心境まで理解できたという（『列子』湯問篇）。転じて、自分の心を理解してくれる人、親友の意をあらわす。伯牙は鍾子期が死ぬと、琴の弦を絶って弾かなかったとも伝える。

「知足」の故事は、十月十三日「足」参照。

○十月二十八日

常用漢字 本字・旧字体 古字

漢音 ケイ

## 形 形 形

呉音 ギョウ (ギヤウ)

訓 かた・かたち

「形」は、「彡」と音符「井」とから成り、さまざまな模様をなすわくどりやかた、あるいは、いろいろなかたちがあらわれる意をあらわす。「彡」は、かざりや模様のかたち、光彩のありさまを示す指事文字。「井」は、四角いかたちを示す象形文字。

「形骸」は、「骸」が骨格・骨組みの意で、からだ、肉体、外形をあらわす。「形骸の内」が肉体の内にある心。精神をいうのに対して、「形骸の外」は、肉体を超越した大自然の世界をいう。『晋書』嵇康伝に見える「形骸を土木にす」とは、外貌を土や木のようにして飾りたてないこと。なりふりをかまわない意。

「形容」は、顔かたち、容貌。ありさま、状態。また、様態を言ひあらわすこと。戦国時代、楚の屈原の作という「漁父の辞」に、「顔色憔悴し、形容枯槁せり」とある。「枯槁」は、瘦せ衰える、やつれる意。

晋の陶潜(淵明)は「帰去来の辞」の中で、「心を以て形の役と為す」と詠じる。精神(心)が肉体(形)に支配使役される意。

○十月二十九日

常用漢字

漢音 エイ

呉音 ヨウ (ヤウ)

## 影

訓 かげ

「景」という字は、「日」と音符「京」とから成り、物を照らす光

と、光が作りだすかげの意をあらわす。「影」は、「彡」とこの「景」とから成り、広く「影」の訓が行われるが、物が光に照らされてできる影を意味するだけでなく、物を照らして明暗をつける光(月影)、物の姿や形(人影)、鏡や水面に映った姿をあらわす。現代中国語では、写真の映像の意味もあらわす。

唐の李白は「峨眉山月の歌」(七言絶句)に、

峨眉山月 半輪の秋

影 平羌江水に入りて流る。

と詠じる。承句の「影」は、光。秋の月の光が平羌江水にさして、水とともに流れていく光景がうたわれる。

「形影」は、形と影。常に離れないでいるものたとえ。「形影相弔う」は、自分の身体とからだだが互いになぐさめあつていゝる意。魏の曹植の「躬を責めて詔に應ずるを上る表」にある語。

○十月三十日

常用漢字

漢音 トウ

呉音 ト・トウ

## 刀

訓 かな

「刀」は、刃のそったかたなの形を描いた象形文字で、かたなの意をあらわす。片刃のかたなやナイフの総称。また、刀の形をした古代の貨幣(刀貨・刀泉)。

「刀俎」は、包丁とまないた。転じて、料理すること。さらには、危険な場所や境遇、あぶないものをいう。「如今人は方に刀俎為り、我は魚肉為り」は、『史記』項羽本紀が記す「鴻門の会」の一節で、

緊迫した宴席から廁かわやに起った沛公（劉邦）が挨拶せずに出てきたことを気にする折から、樊噲はんかいがいまの危険な状態をいったことば。

「刀筆」は、昔、竹簡や木簡に書き誤った字を削る小刀と、文字を書く筆。転じて、筆を指す。「刀筆の吏」は、記録をつかさどる小役人。「快刀」は、刃がよく切れるかたな。「快刀 乱麻を断つ」は、もつれた麻を切れ味の鋭い刀で断ち切ること。紛糾している物事をてきばきと処理することにとえる。「刀自」は、老母、婦人の尊称。婦の古字である「負」を分解して、誤用されたという。

○十月三十一日

常用漢字 旧字体 俗字 呉音 モン

## 万 萬 万

漢音 バン  
慣用音 マン

旧字の「萬」は、二つの大きなはさみをもつサソリを描いた象形文字。借りて、数をあらわす字として用いられた。「万」は、「卍」の変形から出て、古くから「萬」の通用字となり、後にサソリは「董」と書かれた。よろず（千の十倍）、あまた、すべての意をあらわす。

「万人の敵」は、一人で万人もの敵を相手にして戦うことのできる術、すはわち兵法を指す。『史記』『項羽本紀』には、「剣は一人の敵なり。学ぶに足らず。万人の敵を学ばん」との若かりし項羽の言を記している。「一人の敵」は、一人の敵を相手にする剣術、武術の意。

「万里」は、一万里。ひどく遠い距離、きわめて遠く離れた所をいう。「万里の長城」は、北方民族が侵入するのを防ぐ目的で中国

の北辺に築かれた城壁。天下を統一した秦の始皇帝が、東は渤海に面する山海関から西は甘肅の臨洮にいたるまで延伸増築した。現在のもは明代の城壁であり、二千キロに及ぶという巨大建造物は世界遺産となっている。

また「万里同風」は、天下が統一されて都から遠隔の土地まで風俗や文化が同じになること。

○十一月一日

常用漢字 呉音 モン

## 門

漢音 ボン  
訓 かど

「門」の字は、左右二枚のとびらをしつらえた、もんのさまを描いた象形文字で、左右対称形をとる。

門扉は左右一对であるので、門を守護する門神は、古くの神荼・鬱壘うり以来、二神一对である。『西遊記』には、唐の太宗の臣下である秦瓊と尉遲敬徳が、宰相の魏徴の斬首した涇河龍王けいがの死霊にたたられる太宗の宮門を護衛するストーリーが展開する。太宗はその労苦をみるに忍びず、二将の絵姿を左右の門に一枚ずつはらせたという。これが門神の由来で、秦瓊は「文門神」、尉遲敬徳は「武門神」とよばれ、それぞれ白い顔と黒い顔の装束で左右の門扉を飾りまもった。

「門庭 市のごとし」は、門に人がにぎわう意。これに対して、「門外 雀羅を設くべし」は、門の外に雀を捕るあみを張ることができる意で、訪ねてくる人も無く、門前の極めて寂しいさまをいう。『史記』汲鄭列伝賛にみえる。

○十一月二日

常用漢字 古字 異体字 異体字 呉・漢ヤ

## 野 埜 埜 埜

漢音 ショ  
呉音 ジョ

訓 の

「野」は、「里」と「予」から成り、ひろびろと広がる田畑、のはらの意をあらわす。「里」は、四角く区画した地をあらわし、「予」は、のびる意。

「野」には、「原野」「曠野」のはら、「田野」の耕作地のほか、広々とした郊外の「郊野」、朝廷に対して民間を意味する「在野」、素朴で洗練されていない「野鄙」などの語に代表される意味もある。

「シヨ」と読むと、いなかやの意。「別野(墅)」は別荘の意。

『論語』子路篇にみえる「野なるかな、由(弟子の子路の名)や」とは、孔子が問答のさなかに子路のがさつさをいっただことば。

『書経』大禹謨にいう「野に遺賢無し」は、賢者がことごとく任用されて、民間に隠れ住む者がいないことをいう。また、「野に青草無し」は、口にできる草さえない、飢饉の甚しいさまをいう。

『晋書』嵇紹伝にある「野鶴の雞群に在るがごとし」は、原野にいる白い鶴が鶏の群れの中にあるようにひとときわ目につくことで、衆人に抜き立てるとえ。

○十一月三日

常用漢字 漢音 ブン

## 文

漢音 モン  
呉音

訓 ふみ

後漢の許慎の『説文解字』には、「文」は、筆画を交錯させて描きだしたあや模様であると説いている。模様、飾り、いろどりをあらわす「文」(あや)は、「質」(実質)に対する語で、みやびやかさや外面的な文飾を意味する。『論語』雍也篇に見える「文質彬彬」は、文と質すなわち外觀と内容が調和していることをいう。「彬彬」は、適度に相雜りとのふさま。

「文字」は、ことばを書きあらわす符号であるが、「文」は、象形文字のような独体のもので、「字」は、形声文字や会意文字のような合体のもので、区別された。「ふみ」の訓で、文字、文書・書物、書状・手紙、また学問(特に漢学)を意味する。『論語』学而篇には、「行いて余力有れば、則ち以て文を学ぶ」という。「文」は、書かれたもの、文書の意で、ここでは『詩経』『書経』などの古典を指す。『論語』子張篇には、「小人の過つや、必ず文」との子夏の言がみえる。また、「文身」は、からだに入れ墨をする意。

○十一月四日

常用漢字

## 章

呉・漢 ショウ(シヤウ)

「辛」は、入れ墨に用いる大きな針や鋭い刃物をかたどる象形文

字。「章」は、その「辛」を刺して入れ墨をすることで、しるし、もよう、また、音楽や詩文のひとまとまりの意をあらわす。

『論語』公冶長篇にみえる「斐然として章を成す」は、美しく模様を織りなしている意。「斐然」は、あやが美しいさま。孔子は陳の国で故郷の魯の若者たちのことを想い出し、「帰らんか、帰らんか」と口にする。彼らを織物にたとえて、生地としては織りあがっているが、まだ実用にいたらない（「之を裁つ所以を知らざるなり」）ので、帰って指導しようといったのである。

「終日 章を成さず」は、牽牛・織女の七夕伝承を詠じた「古詩十九首」第十首の句。素い手を擽げ、機杼を動かしながら、「終日章を成さず、泣涕零つること雨の如し」とうたう。

「断章取義」は、「章を断ち義を取る」と訓み、詩や文章の部分抜き出して、本来の意味に関係なく用いること。「望文生義」とともに、学問に対する戒めの意味をあわせもつ。

○十一月五日

常用漢字 簡体字

## 筆 笔

漢音 ヒツ

呉音 ヒチ

訓 ふで

「聿」は、手でふでをもつさまをあらわした会意文字で、「筆」の原字。「竹」を増し加えた「筆」は、竹の柄をつけたふで、竹製のふでの意で、「聿」と区別した。

「筆」は、文字や絵をかく道具であり、秦の始皇帝につかえた蒙恬が発明したともいわれる。

「筆翰」は、ふで。「翰」は、長い羽毛でつくった筆の意。「筆墨」

は、ふでとすみ。「筆札」は、筆と木のふだ。「札」は、昔、文字を書くのに用いた木のふだをいうことから、転じて、ふでとかみを指す。「筆跡」は、筆のあとの意で、書かれた文字や絵、また、その書きぶりを意味する。

「筆削」は、書くべきところは書き、削るべきところは削る意。『史記』孔子世家に、「『春秋』を為るに至りては、筆すべきは則ち筆し、削るべきは則ち削る」とあるのに依る。

「擗筆」は、筆を擗くこと。

○十一月六日

常用漢字 旧体字

## 墨 墨

漢音 ボク

呉音 モク

訓 すみ

「黒」は、煙突に火をもやしたすがつまつたさまを示す会意文字。旧体字の「墨」は、「土」と音符「黒」とから成り、すすと土とをこねませて作ったすみ、あるいは、土状のすすのかたまりをあらわす。

墨は、文房四宝の一つ。油煙や松根を燃やして出るすすを練り固めて作り、これを硯ですって、黒い液にして書画を書くときに用いる。

「墨水」は、すみをすった液汁。「墨書」は、すみで書くこと。「墨迹・墨蹟・墨跡・墨蹤・墨痕」は、すみで書いた筆のあと、その書画。宋の葉夢得の『避暑録話』に、「墨を磨ること病夫の如し」という。墨をするには、墨の液汁が粗くならないよう、手の力を抜いてするとよいことから「病夫」にたとえる。

「墨刑」は、古代の五刑の一つで、額に入墨する。「黥刑」ともいう。

「墨守」は、墨家の始祖である墨翟が、楚王の面前で行った模擬戦争で、攻める楚の軍師公輸般に対して城を守り通した故事から、敵を防ぎ守りの堅固なこと。

○十一月七日

表外・人名用漢字

簡体字

異音・漢音  
ケン

## 硯

## 硯

慣用音  
ケン

「硯」は、「石」と音符「見」とから成り、すずりの意をあらわす。硯は、文房四宝の一つ。すずりは、「墨磨」の転で、墨を水ですりおろすために用いる道具。陶磁製のものや、泥を精選して焼きあげた澄泥硯もあるが、古くから石の硯が作られ、唐代後半から安徽省の歙州石、広東省の端溪石が用いられた。石質や石紋、眼などが賞玩された。とりわけ老坑などの石が有名。

「硯池・硯海」は、すずりの、水をためるくぼんだ場所。墨池ともよぶ。「硯滴」は、すずりに水をたらす水差し。

「硯田」は、詩人や文人の用いるすずりを農夫の田地にたとえて、文筆で生活することをいう。「硯席」は、すずりを置いて学問をする席。同じ師について勉強することを、「硯席を同じうす」という。

「硯北」は、手紙で宛名のわきに書き添えて、相手への敬意をあらわすことば。書斎で、机を南に向けて置くと、硯の北側に人が坐ることになることからいう。「研北」とも。

○十一月八日

常用漢字

異体字

異音・漢音  
シ

## 紙

## 帑

訓  
かみ

IT・電子技術の発達によってペーパーレス化がさまざまに叫ばれている。「紙」という字は、繊維をすいて薄く平らにのぼしたかみの意をあらわす。「氏」は、さじをかたどる象形文字で、平らかにのぼす意をもつ。

かみは、後漢の和帝の時、蔡倫が樹皮・麻、ほろ布や魚網を用いて作り、これを「蔡侯紙」とよんだと伝える。唐の李瀚の『蒙求』には、「蔡倫造紙（蔡倫 紙を造る）」の四字で事績を記載する。

「紙田」は、紙を田地にみたてた語で、字を書いて生計をたてることを「紙田を耕す」というが、現今では文筆を生業とすることはない。はなかなか厳しい環境にある。

「紙筆」はかみとふで。また、文章を書くこと、学問や勉強をすることをいう。晋の陶淵明は「子を責む」詩の中で、

五男兒有りとも雖も  
繪て紙筆を好まず

と詠じている。往時も今も変わらぬ親の繰り言でもあるか。

「紙魚」は、書籍や衣類などを害する虫。しみ、しみむし。「衣魚」「蠹魚」ともいう。

「紙銭」は、死者を葬る時、棺の中に入れて焼いたりする紙で作った銭のこと。

○十一月九日

## 簡簡簡

常用漢字 旧体字 簡体字 漢音 カン

呉音 ケン

「間(間)」は、門の扉のすきま。「簡(簡)」は、「竹」と音符「間(間)」とから成り、一枚ずつ間隔をあけてとじた竹の札の意をあらわす。

まだ紙のなかった時代、竹や木で作った札に文字を書いて、ひもでとじて並べた。

間が空いている、間を省いてある、手をぬいてあるといった意をあらわし、また、「揀」に当てて、えらぶ意に用いる。

「簡素」は、簡略で質素なこと。飾り気がなく、さっぱりと穏やかなこと。また、竹簡と縑素けんその意。「素」は、白絹をいう。

唐の韓愈の「符(息子の名)書を城南に読む」詩には、「灯火とうか軽く親しむべし」(十月二十一日参照)につづいて、

簡編 巻き舒のぶるべし

と詠まれる。「簡編」は、簡をとりあわせて書物としたことから、書物、本をいう。「巻き舒ぶ」は、巻き閉じることと舒べ広げる意。「簡漫」は、応対や仕事において、手間を省いて、いい加減にしらうこと。

○十一月十日

## 冊冊冊冊

常用漢字 旧体字 本字 異体字 慣用音 サツ

漢音 サク

呉音 シャク

「冊」は、文字を書いた長短ふぞろいな竹のふだや木のふだを、ひもで横に編んだ形を描いた象形文字。上下を編んだことから、「冊」が正字形とされた。

いわゆる木簡(木のふだ)や竹簡(竹のふだ)をひもで編みとじたものが、書物の原形であり、「ふみ」と訓じて、書物、文書、手紙の意をあらわす。「サツ」という慣用音で音読みされるのは、「札」の音と混同したことによると考えられている。書物を数える助数詞としても「サツ」が定着し、「冊数」のように用いている。

「冊書」は、臣下に対する天子の命令を記した文書、また、后妃・諸侯を立てる勅書、祭祀や爵位・封地の授与などを記した文書をもいう。「冊命」は、皇后、皇太子などを定めるとき、詔書(冊書)を書いて命ずること。「冊立」は、詔書によって、皇后・皇太子などを立てること。「冊」は、立てる意。

「短冊」は、日本で、物品の品目や数量を書いた細長い紙。また、和歌や俳句を書く料紙をいったもの。

○十一月十一日

常用漢字 旧体字 呉・漢 ヘン

## 編編

訓 あム

「戸」と「冊」とから成る「扁」は、戸口にかける薄く平らなふだ。転じて、薄く平ら、扁平の意をあらわす。「編」は、「扁」(薄いふだ)や「簡」(平らな竹簡・木簡)を糸でつづり合わせることから、あむ意をあらわす。

「編柳」は、楚の孫敬が貧しくて柳の葉を編んで書写に用いたこと。「編蒲」は、漢の路温舒が貧乏で蒲の葉を編んで書写に用いたこと。ともに苦学することになどえる。

「編簡」は、簡をとじつらねた書物、書籍。「韋編」は、簡をとじた革ひも。「韋」は、革。「編」は、とじひも。『史記』孔子世家に、孔子は晩年にいたって易を喜んで反覆熟読し、「韋編三たび絶つ」(革のとじひもが三度も切れた)と伝えている。

「編年体」は、歴史の記述のしかたの一つで、事柄を年月の順に書きならべたもの。人物の伝記を主体とする「紀伝体」、事件ごとに始めから終わりまでを記す「紀事本末体」に対していう。

○十一月十二日

常用漢字

## 典

呉・漢 テン

「典」は、長短ふぞろいの簡を横に編んだ「冊」の字の原形と、それを並べて載せる台の形をあわせた会意文字で、貴重な書物(「古典」「経典」)、手本・のり(「法典」「典範」)、つね(「典例」「典常」)の意をあらわす。

「典雅」は、正しくみやびやか、上品。「典雅の辞」は、そのことば。『魏書』胡叟伝に、「羣籍を披読し、再び目に閲し、皆口に誦し、

好く文を属し、既に善く典雅の辞と為す。」という。

「出典」は、故事の出どころ。「典故」は、典札と故実。また故事をいう。

「典衣」「典冠」の「典」は、つかさどる意。君の衣を掌る官と君の冠を掌る官。

魏の文帝(曹丕)の「典論」は、古今の經典や文学を論じた書で、中国における文芸批評のさきがけとなったが、わずかに『文選』巻五十二に「論文」を存するだけである。「蓋し文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」と、文章(文学)を国を治める大業であると位置づける。

○十一月十三日

常用漢字

旧字体

異体字

呉・漢 キ

## 器 器 器

訓 うつわ

旧字の「器」は、「𠩺」と「犬」とから成る会意文字。「𠩺」は、さまざまな容器の意で、「犬」は種類の多いものとして加える。また、「𠩺」は、たくさんの口の意で、たくさんの犬が吠えたてるところともいう。借りて、うつわの意に用いる。

諸侯が大夫を他国へ使いに出すときの儀式に用いる四種類の玉器を「四器」とよぶ。圭・璋・璧・琮がそれである。また、形を描いたり測定したりするのに用いる規・矩・準・繩をも「四器」という。

「大器」は、すぐれた才能や器量、また、その持ち主をいう。「大器小用」は、大人物をつまらない仕事に使うことで、宝のもちぐ

され、適材適所ならざる不適な人材登用を諷論した語。「大器晩成」は、大きな器、すなわち大人物は、すぐには出来あがらず、後になって出来あがる意。『老子』第四十二章に出現する語。転じて、天子の位、国家権力をもいう。

○十一月十四日

常用漢字

## 犬

呉・漢 ケン  
訓 いぬ

犬は、古代社会において家畜化し、獵犬・番犬、また食用として飼育されてきた。「犬」の字は、いぬの形の象形文字で、犬の種類や類似する獣類、あるいは野性の性情や行動などに関する文字をつくりだし、偏になるときは「犾」の形で書いた。

中国の蜀の地方は、雨や霧が多い山国で太陽を見ることが少なかったため、たまに太陽があらわれると、犬が怪しんで吠えたてたという。いわゆる「蜀犬 日に吠ゆ」の故事であり、見識の狭い者が賢人の言動を疑い非難することになたとえる。

「犬羊の質」は、才能のない生まれつきの意。犬と羊は、つまらぬもののためとえ。

また、犬と馬を意味する「犬馬」は、臣下が君主に対し、へりくだってということば。「犬馬の心」は、臣下が君主のためにつくす心。「犬馬の勞」は、自分が君主や他人のために労苦をいとわずつくすこと。その骨折りの謙称。

「犬猿」は、仲の悪い者のたとえ。

○十一月十五日

表外・非人名用漢字

## 戌

慣用音 ジュツ  
漢音 シュツ  
呉音 シュチ

「戌」は、「一」と「戈」とで、作物を刃物で刈りとって、一つにくくり、収穫する意をあらわす会意文字。十二支の十一番目で、時刻では午後八時前後の二時間、方角では西北西、動物では犬、五行では土に当てる。「いぬい」は「戌亥」の方角で、西北。「乾」でも表記する。

「戌戌の政変」は、清の光緒二十四年（一八九八）戌戌の年に起こった政変。日清戦争に敗れた清朝が、康有為らの維新党を肅清した。

「戌」は、つちのえ（土の兎<sup>え</sup>）。十干の五番目。「戌・戌・戌・戌」は字形がまぎらわしいので、区別して覚える。「土のうえ（戌）に、犬（戌）一匹で、人まもる（戌）、斧（戌）振りあげりや、ボウ（戌）ジュツ（戌）ジュ（戌）エツ（戌）」。また、「たてばうち（伐）、すわれば守る（戌）人と戈、土（戌）に一ひく犬（戌）の影かな」。

○十一月十六日

表外・非人名用漢字

## 狗

呉音 ク  
漢音 コウ

「駒」や「狗」の「句」は、小さい意をあらわすという。大きいいぬを「犬」、小さいいぬを「狗」というとの説もある。『莊子』雑

篇天下にいう「狗は犬に非ず」は、形は同じでも名からいえば異なることをいったもの。

晋の陶淵明は「園田の居に帰る」の詩中に、

狗は深巷の中に吠え、

雞は、桑の樹の顛いただきに鳴く。

と詠じる。いわゆる「鶏犬の声」(十一月十八日参照)を介して郷里の変わらざる閑適なる空間を表現している。

「羊頭狗肉」は、「羊の頭を掲げて狗の肉を売る」を略した四字熟語で、見かけ倒しや誤魔化しをたとえていう。

「狗盜」は、いぬのようにそつとしのびこんで盗みとること。また、その盗人をいう。戦国時代、斉の孟嘗君の養った食客の中に、狗盜をよくする者と鶏鳴をよくする者がいて、秦の昭王に捕えられた孟嘗君の危難を救った故事が知られる。

「天狗」は、日本の伝承にいう「テング」とは異なり、流星や彗星、あるいは狸に似て白首で、よく凶を避ける怪獣をいう。

○十一月十七日

表外・人名用漢字

## 酉

漢音 ユウ (イウ)

呉音 ユ

訓 とり・ひよみのとり

「酉の市」は、毎年十一月の酉の日に全国各地のおおとり神社の祭礼で、縁起物の熊手が知られる。

そもそも「酉」の字は、酒をかます容器、酒を入れる口の細いつばの形を描いた象形文字で、酒つば、酒の意をあらわした。

十二支の第十番目に当て、方角では西方、動物ではとり、季節

では陰暦の八月、時刻では午後六時前後の二時間の意をあらわす。

「酉月」は、陰暦八月の異名。「八月たるや、律は南呂に中るあた。(略)其の十二子に於いては酉為り。酉は、万物の老いるなり」と『史記』律書にいう。「酉」(酒)は、八月に黍が成熟して醸すことから、成る、老いる等の義にも用いる。

「二酉」は、湖南省沅陵県にある大酉と小酉の二山を指す。『太平御覽』卷四十九に引く『荊州紀』にいう、「小西山の上の石穴の中に書千卷有り。相伝う、秦人 此に於いて学び、因りて留む、と」。後世、藏書の多いことを「二酉」というのはこれに基づく。「二酉堂」は、清の張澍の書齋名で、その輯めた叢書を「二酉堂叢書」という。

○十一月十八日

常用漢字

繁体字

本字

簡体字

漢音

ケイ

## 鶏

## 鷄

## 雞

## 鸡

呉音 ケ

訓 にわとり

「とりの象形文字である「鳥」と、音符「奚」とから成る。「奚」は、ケイケイという鳴き声とも、時を告げる夜明けの意ともいう。また「爪(手)」と「糸」で、ひもで繋いで飼った意をあらわすとの説もある。

にわとりは、太古から飼育され、おんどりは時をつくり、めんどりは卵をうみ、その肉は食用となる。犬とともに古代社会において身近な存在であり、「小国寡民」の理想的な社会空間を説いた『老子』第八十章において「鶏犬の声相聞こゆ」と並称されて、平和でのどかな鄉村空間のシンボルとなった。

にわたりのあばらを意味する「鷄肋」は、食べるほどの肉はついていないが、捨てるには惜しいものをいう。『三国志』「魏書」武帝紀の注に引く『九州春秋』には、漢中をめぐる劉備との攻防戦が膠着する中で、曹操がいった「鷄肋」の語に対して、配下の楊修が、「鷄肋は捨てるには惜しいが、食べるほどの肉はついていない。漢中は惜しいが、撤退なさるつもりだろう」と解釈して、その準備をさせたことが見えている。

「雞黍」は、鶏を殺し、きび飯を炊いて、人をもてなす意。

○十一月十九日

常用漢字

漢音 コウ

呉音 ク

訓 くち

## 口

人間のくちの形にかたどる象形文字。口は飲食し言語を発する器官で、これを部首にして、たべる、のむ、声を出すなどの、口に関わる字が作られている。

「口に密有り、腹に剣有り」は、宋・司馬光の『資治通鑑』唐紀にみえる語。唐の玄宗に仕えて権勢をほこった宰相の李林甫が、密のように甘いことばで人に親切に接する一方、腹の中には剣をひそませ人を害する陰険な人格であることを説いたもの。

「口頭の交わり」は、口先だけの交際、ことばだけで内容のないつきあい。「口頭試問」の「口頭」は、文書に対して、ことばで述べる意。

「口角 沫を流す」は、唐の李商隱の「韓碑」詩にみえる語。「口角 沫を飛ばす」に同じく、つばきを飛ばして激しく議論するこ

と。

「利口」は、「利巧」「伶俐」とともに、賢く利発なことを意味するが、本来、口先がうまいこと、弁舌の巧みなこと、口達者なこと。

○十一月二十日

常用漢字

本字

漢音 セツ

漢・慣ゼツ

訓 した

## 舌

「舌」の字は、口の中のしたをあらわし、その動作に関わる字の部首となる。

舌は、口腔にあり、五感の一つである味覚や、ことばの発声をつかさどる重要な器官である。「饒舌」はおしゃべり・多弁をいい、「舌人」は通訳する人をいう。『論語』顔淵篇にある「駟も舌に及ばず」は、駟（四頭立ての馬車）で急激に追いかけても、舌から出たことばには追いつけないことをいった語。孔子の弟子の子貢が衛の棘子成の発言を評したもので、失言はしかえしがつかないことを説いている。舌は、ことばの意。

俗に舌の長さは三寸といい、南宋・羅燁の『醉翁談録』甲集巻一「舌耕叙引」「小説開闢」には、読み切り短篇物をなりわいとする講釈師が、ただ「三寸の舌」によって是非を褒めそやしたり貶したりし、一万言のことばを費やして古今の話題を講論するといっている。

舌先三寸は、口先だけのことば。「筆鋒」「筆禍」に対して、「舌鋒」は鋭い弁舌、「舌禍」は自分の言論がまねく災い。

○十一月二十一日

常用漢字

## 露

漢音 ロ

呉音 ル

慣用音 ロウ

訓 つゆ

「露」は、「雨」と音符「路」とから成り、連なりむすぶ水のつぶ、あるいは、透明にすけてみえることを示し、つゆ、あらわす、あらわれる意をあらわす。

つゆは、大気中の水蒸気が凝固して、物の表面に付着した水滴で、その凝結する温度を「露点」という。はかないことのたとえに用いられ、昔、葬式のとくにうたった挽歌に「薤露」があった。「薤」は、にら、おおにら。にらの細い葉にやどった露は落ち消えやすいことから、人生のはかなさを象徴した。

「甘露」は、天下太平のしるしとして天が降らすあまいつゆ。このつゆを飲むと不老長生を得られると信じられた。漢の文帝は、この天の露を受けとめるべく、高い銅柱の上に仙人の掌をかたどった「承露盤」を建章宮に設けた。唐の李商隱は「漢宮詞」と題する五言絶句に、武帝が「消渴疾」（糖尿病）を病む文章の侍臣、司馬相如にさえ、「金茎の露の一杯をも賜らず」と詠じている。

「露頭」「露呈」は、あらわれる意。

○十一月二十二日

常用漢字

## 霜

漢音 ソウ(サウ)

訓 しも

「霜」は、「雨」と音符「相」とから成り、水蒸気がこおって霜柱がたてに並びたつさまをあらわし、しも、しもばしらの意に用いる。

しもは、花のように白く美しいから、「霜花」という。転じて、白髪にたとえる。「霜降」は、霜が降りること。二十四気の一つで、陽暦十月二十二日、または二十三日。『易経』坤にいう「霜を履んで堅氷至る」は、霜を踏む時節になると、やがて堅い氷がはる時節がめぐりくる意。物事は、最初をつつしむべきだとの戒めを含む。

「志は霜雪を懐く」は、『後漢書』禰衡伝に見える語。「霜雪」は、霜と雪の意で、志が潔白で厳しいことをたとえる。また、「霜露の病」は、風邪、感冒をいう。「霜露」は、霜と露の意。

「霜葉は二月の花よりも紅なり」は、唐の杜牧の「山行」の詩句。「紅」の色彩あざやかな句作である。

「星霜」は、としつきの意。「霜信」は、雁の別名。

○十一月二十三日

常用漢字 旧字体

## 勞

呉・漢 ロウ

「勞」の字は、かがり火の聖なる火で農具を清める農耕儀礼をあ

らわすという。また、火を燃やしつくすように、力を出しつくす意をあらわし、激しくエネルギーを消耗する仕事やその疲れをもいう。あるいは、いたわる、ねぎらう、なくさめる意をもつ。

『莊子』天運篇にいう「勞して功無し」は、一所懸命労働してある事につとめながら、功績の無いことをいう。また、『史記』項羽本紀には、「勞苦はなはだしくして功高し」の語がある。この「勞」は名詞で、激しい仕事を指す。

『孟子』滕とう文公上篇にある「或ひは心を勞し、或ひは力を勞す」の「勞」は、ついやしつかれる意。また、いたわる、ねぎらう、慰勞の意。

「勞使」は、漢語本来は、こき使う意味というが、日本語では、労働者と使用者とを呼称した語として理解され、「勞使交渉」のよ用に用いられる。

○十一月二十四日

常用漢字 旧字体

## 勉 勉

漢音 ベン  
呉音 メン

「勉」の字は、「力」と音符「免」とから成り、力をいれてつとめる、農事につとめる意をあらわすという。「免」は、女性が出産するさまを描いた象形文字で、力をいれる、力む意ともいう。

『説文解字』には、「彊きよむるなり」と説く。いわゆる「勉強」の語は、「勉強」とも書いて、困難なことをはげみつとめること、また、無理じいすること。『中庸』には、「或いは安んじて之を行ひ、或いは利して之を行ひ、或いは勉強して之を行ふ。其の功を成すに

及んでは一なり」とある。学問にはげむ、勉強する意。また、商人が値段をまける意は、日本的な用法。

「勉勵」は、つとめはげむ、つとめはげます意。勉は、無理をおしてやらせる、勵は、力をこめてはげます意という。晋・陶淵明は「雜詩」の中で、「時に及んでは当に勉勵すべし、歲月 人を待たず」と詠じ、人を待つことなき時間の流れの中で、ここぞと意を決して臨むべき処生のありかたを主張している。

○十一月二十五日

表外・人名用漢字

## 粟

慣用音 ゾク  
漢音 シヨク  
呉音 ソク  
訓 あわ

「粟」の字は、ばらばらになる意をもつ「西」と穀物・穀類の意の「米」とをあわせた会意文字で、小さくばらばらした穀物の意味をあらわした。

「あわ」は、畑で栽培し、その実は黄色をして小さく丸い。そうした「あわ」をとらえた「滄海」が大海原であるのに対して、「一粟」はあわを意味する。「滄海」が大海原であるのに対して、「一粟」は小さなもののたとえに使われている。

穀物・食糧の意だけでなく、「粟」はまた俸祿の意味をあらわす。『史記』伯夷列伝にある「義として周粟を食まず」の語は、周の武王が殷の紂王を討伐するとき、伯夷と叔斉の兄弟が、臣たる者が君を弑ころすことの非を説いて諫めたがいられず、周の祿を食むことを恥として首陽山に隠れたことをいう。二人は清廉潔白の士

とされるが、首陽山でわらびをとって食べ、ついに餓死したと伝えられる。

○十一月二十六日

常用漢字 旧字体 俗字

## 穀 穀 穀

呉・漢 コク

穀物の意をあらわす「禾」と、堅いからを示す「穀」とから成り、堅い殻をかぶった穀物の実をあらわす。

「穀」は、たなつもの、広く穀物の意に用いる。『説文解字』には「百穀の総名」という。二十四氣の一つである「穀雨」は、清明の次に来る節気で、百穀を生み育てる雨の意。陽暦では四月二十日ころ。いわゆる「花信風」は、小寒・大寒・立春・雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨の初候・中候・末候それぞれに咲く花のたより。「花の王」と称される牡丹は「穀雨初候」の花に配される。

漢・袁康の『越絶書』越絶外伝枕中に「穀多ければ則ち兵彊し」という。穀物の実りは富国の基盤であり、その蓄えあつてこそ強兵ならしむることができるとの説である。

「辟穀」は、穀物を食べるのをさける意。神仙の道を求める道家の養生法で、『史記』留侯世家に、「穀を辟け道引し身を軽くするを学ぶ」と見えている。

また「不穀」は、王や諸侯のへりくだった自称。

○十一月二十七日

常用漢字

## 耳

漢音 ジ  
呉音 ニ  
訓 みみ

「耳」は、人間の<sup>みみ</sup>の形にかたどる象形文字で、耳の状態やその働きなどに関する漢字の部首ともなっている。

『論語』為政篇に、有名な「六十にして耳順<sup>しな</sup>う」の句がある。六十歳になった孔子は、人が言うことを逆らうことなく素直に聞けるようになったという。「耳順」は転じて六十歳をいう。

「耳聞は目見に如かず」は、「百聞は一見に如かず」の意で、『説苑』政理篇を典拠とする語。

「耳学」は、いわゆる耳学問、ただ聞き覚えて知ること。『荀子』勸学篇には、

小人の学や、耳より入りて、口より出づ。口耳の間、則ち四寸なるのみ。

と、小人の学問が耳から入れて口から出す「口耳の学」で、浅薄で未消化なことを戒めている。また同じく『荀子』性悪篇には、「生まれながらにして耳目の欲有り」と、美しいものをみたい聞きたいという欲望を人間の生来のものと見ている。

○十一月二十八日

常用漢字

## 目

漢音 ボク  
呉音 モク  
訓 め・ま

五官の一つである「め」は、鼻の上に左右一対あって、視ることをつかさどる。「目」の字は、横長のめを描いてそれをタテにした象形文字。

中国古代、黄帝の臣下で、鳥獣の足跡を見て文字を作ったという蒼頡は、四つの目をもっていと伝承される。その左右上下に二つずつある目は文字を考案する観察力・洞察力のシンボルと解される。

「目論」は、他者の欠点はわかって、自分自身の欠点はわからないこと。『史記』越王句踐世家の「目は豪毛ごうもうを見るも其の睫まつげを見ず」にはじまる言説にみえる語。「豪毛」は、毛の先、細くわずかなもの。「睫」は、まつげ。微細なものまで見えるが、目の間近にあるまつげを見ることはできないことから転じていう。「目論み」は日本語の用法。「目論見」はあて字。

唐・王之渙の「鶴鵲楼に登る」(五言絶句)に「千里の目を窮めんと欲して、更に上る一層の楼」の転・結の二句がある。はるか  
に広がる眺望をきわめつくそうとする思いを巧まず伝える。

○十一月二十九日

常用漢字

異体字

異体字

漢音

カン

鑑

鑒

鑒

呉音

ケン

訓

かんがミル

「監」は、水かがみに上から体を伏せて、顔をうつすことをあらわす会意文字。のちに水かがみに代わって、青銅をみがいたかがみが用いられるようになったので、「金」を加えて、「鑑」の字が使われた。

「鑑」は、姿をうつしだし、「龜」は、吉凶の占いに用い、基準となるので、「龜鑑」は、手本、模範の意をあらわす。

『詩経』大雅・蕩には、「殷鑑いんかん遠からず、夏后の世に在り」の詩句がある。殷の人が戒めとすべき鑑(手本)は、遠い時代にあるのではなく、すぐ前の夏の王朝が桀王の暴政のために滅びた歴史にあるとの意。自分が戒めるべきことはすぐ近くにあると教えている。

『莊子』徳充符篇には、「鑑明らかなれば則ち塵垢止まらず、止まれば則ち明らかならず」と、くもり無き鏡こそよく物を照らしだすことを説いている。また同篇に、「仲尼(孔子)曰く」として引く「人 流水に鑑みる莫く、止水に鑑みる」との言は、静止した水に正しい姿がうつることを示している。

○十一月三十日

常用漢字

呉音 キョウウ(キヤウ)

漢音 ケイ

鏡

訓 かがみ

「鏡」は、「金」と音符「竟」とから成り、はつきりうつし出す銅製のかがみをあらわす。

かがみに映った花を「鏡花」という。水に映った月を意味する「水月」とともに、目に見えるだけで手には取れないもの、美人や幻にたとえる。明治後期から昭和初期に活躍した小説家泉鏡花のペンネーム「鏡花」は、この「鏡花水月」の語に因んでいる。

破れた鏡を「破鏡」という。陳の徐徳言の妻である楽昌公主(陳の後主叔宝の妹)は、戦乱にあつて夫と別れるとき、鏡を破こわしてそれぞれ半分を持ち、再会の時の証拠の品とした。国亡んで楊素

に娶られた公主は、約束した正月望日に召使をやって半鏡を売り、果してその半鏡を捜し出した徐徳言の詩を見て、涕泣して食らわず、事情を知った楊素は、徐徳言を召しだして妻を還した。この故事は、唐の孟<sup>けい</sup>繁の『本事詩』所載。「破鏡重円（破鏡 重ねて円<sup>ま</sup>し）」と簡称される。

また「破鏡再び照らさず」ともいって、これは夫婦仲の元に戻らないことになどとえる。

今日は「いいミラー」で、鏡の日。

〔補記〕

本「漢字一日一字抄」は、以下の通り分載している。あわせて御覧いただければ幸いである。

〔七月・八月の部〕

『早稲田教育評論』第二十六巻第一号、二〇一二年二月。

〔九月の部〕

『早稲田大学院教職研究科紀要』第四号、二〇一二年三月。

〔十二月の部〕

『早稲田大学院教職研究科紀要』第五号、二〇一三年三月。

【付記】

本報告は、早稲田大学教育総合研究所二〇〇八〜九年度研究会「B-1」「漢字・漢語・漢文に関する教育方法の検討」の報告の一部である。